都留文科大学研究紀要　第79集（2014年３月）
*The Tsuru University Review*, No.79（March, 2014）

# エルアルト市青少年の帰属意識と市民育成
## ― ボリビア多文化共生社会構築の観点から ―

# Ser El Alteño en el Contexto de Identificarse como Ciudadano en El Estado Plurinacional de Bolivia

重　冨　惠　子
SHIGETOMI Keiko

**Resumen**

Para el triunfo de la elección presidencial por Evo Morales, la ciudad de El ALTO jugó un papel muy importante. Los jóvenes alteños mantienen su identidad cultural de origen andina, aymara, pero ellos se identifican más como el alteño y boliviano. Sobre la identificación de jóvenes con la ciudad de El Alto, se considera una influencia por las experiencias positivas de la participación activa en el proceso de construir y formar su propia ciudad. Es importante la contribución por parte de las ONGs y organizaciones civiles como la organización juvenil, Wayna Tambo que tiene actividades a desarrollar para la ciudadanía y participación social. Asimismo esto influye en la identificación de jóvenes como bolivianos, con el sentido más positivo y autónomo que es necesario para construir una patria pluricultural y descolonizada.

## はじめに

南米大陸のほぼ中央部に位置するボリビアは、2009年に「República de Bolivia（ボリビア共和国）」から「Estado Plurinacional de Bolivia（多民族国ボリビア）」[(1)]に国家名称を変更したが、これは先住民族出自の大統領エボ・モラレスが政権に就いたのちに掲げられた国家方針としての「脱植民地化」を象徴するものであった。

1825年にスペイン帝国より独立した後も先住民族系住民―非先住民族系住民[(2)]の関係においては、植民地支配的体制の遺制が土地、雇用、教育など社会の様々な側面において継続され、スペイン帝国支配に端を発するヨーロッパ由来事物および人種を最良とした優劣一元の文化的社会的階梯が維持されてきた。この状況は1952年のボリビア革命でも払拭されることはなかった。82年の民政移管後、新自由主義経済政策のもとでの新改革や近代化政策が推し進められたが、格差是正のための社会保障政策や貧困緩和策は効果をあげず、貧困人口の多い先住民族系住民からの強い反発を招いていた。95年に誕生した先住民族政党は、先住民族復権、差別撤廃、ボリビア国家社会に対する平等な社会包摂を訴えて急速に支持基盤を広げ、2005年の大統領選挙において党首モラレス候補が勝利した。これは人口の過半数におよぶ先住民族系住民にとって500年にわたる差別と排斥からの解放を意味

していた。

しかしだからといって、15世紀からの混淆によって形成されてきた文化や社会、歴史自体を否定できるはずもなく、ヨーロッパ出自との折り合いをつけなければならない。また、先住民族内においては、先植民地時代に栄えたインカ帝国構成民族の政治的発言力が強いものの、差別をうけてきた文化、社会集団は数多くある。これら文化、社会集団間の関係性をどう平等、公正に維持するかという点も大きな課題となっている。したがって「脱植民地化」政策は、優劣一元体制を単純にひっくり返せばいいということではなく、「多元的」ないし「多様な」社会を構築する方向へ向かわざるを得ないのである。

2005年の政治社会変動を支えた動きの一つが、1970年代以降に急速に農村から都市へと移動してきた先住民族系住民によって展開された政治運動、先住民族運動であった。なかでも主都ラパス[(3)]に隣接して急速に拡大形成されたエルアルト市はアイマラ語系住民が多く、政治変動の先鋒を担った地域である。

本稿では、このエルアルト市の青少年層について民族出自に依拠する「アイマラ人」ではなく、居住地域を意識する「エルアルト人」や国を意識した「ボリビア人」として自らを規定している現象に着目するものである。

エルアルト市や先住民族系の青少年をめぐっては、青少年育成や教育の問題、政治化の問題、青少年が引き起こす社会問題などについて論じられ、その中でアイデンティティについても分析されてきた。共通して指摘されているのが、差別と疎外の問題であった[(4)]。先住民族―非先住民族の差別的対立図式において、自らの尊厳を訴えて民族性が称揚鼓舞される中、青少年が民族出自を意識することは当然といえる。ただし本稿では、地域への帰属意識形成については、従来指摘されてきた主流社会への対抗性に加えて、地域に対するより積極的な関与の経験が作用した点を指摘する。またその積極的な地域への関与を後押しした要因について、青少年団体ワイナタンボの活動をとりあげて論じる。そしてボリビア人としての帰属意識についても、既存の枠内、枠組みの遵守にとどまらず、枠組みを構築するプロセスそのものへの主体的参加、当事者としてのより積極的な選択の結果である点を指摘するものである。

## １．先住民族都市エルアルト

### １－１．高地平原の都市

主都ラパスはすり鉢状の盆地であるが、その西部の縁にそって標高約4000メートルの高原台地が広がっており、そこに形成されたのがエルアルト市である。国際空港を有し、西や南、東南部への主要道路の結束地という運輸交通の要衝地でもあり、2008年時点で人口は94万と推計されている。商業地の他工業地帯も存在するが、広大な市街域の多くは居住地域であり、ラパス市のベッドタウンの役割を果たしているボリビア国内最大の郊外都市である。しかしながらエルアルト市民の約7割を貧困層が占める発展途上地域である[(5)]。

そもそもエルアルト地域は1950年代には数家族の地主が所有する閑散とした平原でしかなかったが、その後、農地改革の影響もあって徐々に農村部から都市への人口移動が始まり、主都ラパスへの参入前段階として人々は手近なエルアルトに暫定的に住みつくように

なっていった。1980年代になると軍政から民政へと政治体制が変化したこと、にもかかわらず経済状況が悪化したこと、さらに一部地域における干ばつなどの影響により、農村からの人口流出が増大した。また鉱物資源の国際価格低迷と構造調整政策により鉱山閉鎖が相次ぎ、失業した大量の鉱山労働者とその家族も都市周辺に流れ込んだ。1972年に約６万だったエルアルト人口は1992年には40万人、2001年には64万になっており、人口増加率は年平均９％を超える勢いであった[(6)]。

エルアルト市に流入する者の多くは、ラパス県、オルロ県、ポトシ県といったアンデス山岳高地帯に位置する周辺県の出身者であり、民族的にはアイマラ語系住民が多い。2001年時点での10歳以上人口でみると、全国に占めるアイマラ語系出自人口は25%であり、主都ラパスでは50%であるのに対して、エルアルト市は74%と高かった。一方、非先住民族人口はボリビア総人口の38%、ラパス市では39%を占めていたのに対し、エルアルト市では19%と２割を切っていた[(7)]。

「エルアルト」という名称は「高地」を意味している。ボリビアの西部を占めるアンデス高地は、先植民地期においてはインカ帝国に代表されるように先住民族が繁栄を誇っていた地域であり、「高地」とはすなわち「先住民族の地」を表す。エルアルト市は実質的にも高地先住民族であるアイマラ系住民が大半を占め、さらにその名称からも先住民族性が強く想起される都市なのである。ただし先住民族系住民は、都市部ではなくアンデス高地や渓谷部の農村に暮らしており、先住民族とは「田舎に暮らすもの」であった。

農村からの移民が都市に参入するにあたっては、農村の人的ネットワークを使うことが知られている。出稼ぎなどで都市に出た家族、親族を頼って居住先を確保し、仕事も世話してもらう。移住先において、出自社会を再形成することは移民にともなう現象としてよく知られている。ボリビアも例外ではなく、エルアルトにおいても同郷集団などによる相互扶助がみられ、新しい居住地においても出自社会である農村の先住民族文化が受け継がれている。

ラテンアメリカでは植民地時代には混血状況によって細かく分類され、白人種を最優とする階梯の中で位置付けられていた。ボリビア社会でも近年まで、白人との混血を強調することにより社会参入と社会上昇が果たされてきた。空間的にはこうした社会的文化的階梯のもとで、主都ラパス市では経済階層や社会階層に応じて居住地区や生活圏が住み分けられてきた。しかし1980年代には、富裕層居住区や商業中心区でも農村から出てきた物売りや物乞いが目立つようになっていた。また省庁など政府機関他主要な政治経済および社会機関が集まる中心区には、干ばつによる難民の他に鉱山リストラへの抗議行動のための座り込みやハンガーストライキをする先住民族系人々の姿が見られるようになった。製造業など労働集約型の工業は未発達で、教育や福祉施設も限られているボリビアでは、「混血性」に依拠したりパトロン―クライアント関係をもとに、人々を選択的に社会に取り込んでいくことが主流であったが、もはやそのような既存体系では対応しきれなくなっていた。「農村の先住民族」が同化を前提として主流支配社会である都市部に移動して吸収されるのではなく、地理的に分離した形で独自の都市形成が行われたことにより、高地先住民族都市ともアイマラ都市とも呼ばれるエルアルトが誕生したのである。

主都を取り囲むように広がる高原台地という地理的地形的な点からは、エルアルト地区の急速な拡大は、植民地時代から続く先住民族による主都占拠や反乱を思い起こさせ、主

流社会にとっては潜在的な不安をかきたてることになった[8]。「先住民族」の可視化につれて緊張が高まると同時に排斥の動きも大きくなっていき、新自由主義的経済政策の強硬推進ともあいまって、最終的には軍を動員した不穏分子抑え込みへと発展した。

### １－２．民族性の称揚

ボリビアは他の発展途上国同様、貧困と社会不安、社会制度や教育制度の不備、不安定就業や雇用問題、貧困家庭の問題さらには民族的差別などを抱えており、青少年が安定的自己形成をするために必要な環境そのものが十分ではない。国民総人口に占める15歳以下人口は３割強を占めている一方、貧困人口は約５割、都市部でも４割を超えているため、貧困下での子どもたちの成長や人間形成をめぐる問題は国家にとって大きな課題となっている。エルアルト市については、1980年代には自営業と小売り商売が６割を占め、建設現場での労働などの他、工場など製造業や運送業などへの従事があるが、正規雇用は3割にとどまり、インフォーマルセクターでの不安定就業が常態であった。自営や小売り商売にしても路上や屋台販売が含まれている[9]。マクロ経済指標改善のための新自由主義経済政策が推進されたが、格差是正のための社会開発政策の効果は乏しく、貧困状況はなかなか改善しなかった。10代前半の児童も含めてインフォーマルな労働に従事しているが、その理由は「家計補助」が58.5%、次いで「学費工面」13.4%となっていた[10]。

2000年時点での15－19歳の学歴については、小学校卒ないし中退を合わせても８%、中等教育は83%であり就学率は悪くないものの、25歳以上人口では小学校どまりが35%となっており、中等教育まで行けるようになったのは最近であることがわかる。また、学業放棄理由は「仕事をしなければならないから」が50%、「学費が賄えないから」が32%、留年や学習意欲の減退などの理由は合わせても18%であった[11]。

農村出身者が都市へ移動してくる主要原因は経済・就業機会獲得と教育機会獲得である。エルアルト市においても子どもたちの教育は重要な課題として認識されており、とくに高等教育へのアクセスが限られていることが懸念されていた。また、高等教育をうけても、それが仕事、就業に直結しないことも問題視されていた。こうした中、エルアルト居住であることが理由で就職できない、親が先住民族であることや苗字が先住民族系であることにより雇用されない、就業以外にも様々な面での対応において差別を受けるという事態に遭遇する[12]。結果、主流社会に対する反発が強まり、差別と排斥の理由としての「先住民族」をより強く意識させることになった。

都市化やグローバル化の影響のもと、青少年の間ではロック、パンク、ヘビーメタルなどが流行っており、これらは親世代からは眉をひそめられアンダーグラウンド音楽として位置付けられていた。エルアルト市では、20世紀末からはヒップホップが加わるようになり、アイマラ語で歌うラッパーが登場し、アンデスヒップホップ、アイマララップが流行していった。米国社会における黒人差別の状況と自分たちの境遇との共通性、被差別経験と尊厳回復のための闘争といった側面で共感を得たことが、流行の要因であるとされている[13]。自分たちを取り巻く抑圧的な体制を、「汚れていて」「汚職」にみちている「堕落」した体制であると糾弾し、自己の能力を十分に開花できない状況については、本来あるべき環境が「奪われている」と歌う。そして本来の環境を「奪う」「盗む」不当な輩たちに対して強く反発し、その闘争の拠り所として「アイマラ人種」「自分たちの文化」を称揚

し、あるべき環境や資源の正統な後継者であることを訴えている[14]。民族的帰属意識は、差別と排斥体制や貧困状況の中での疎外感により強められていったのである。

## ２．地域への愛着

エルアルト市青少年の地域への帰属意識についても、地域に付与された民族性へ帰属意識が反映していると考えられるが、より積極的な「地域意識」形成要因を指摘したい。

### ２－１．住民参加型街づくり

エルアルト地区はもともと主都ラパス市の管轄域であったが、急速な人口増加にともなう市街区域拡大に対応するため、1988年に独自の行政区として主都ラパスから分離され、ラパス県ムリーリョ州第四区エルアルト市が誕生した。しかし自治体が設置されたものの、平原地であることが災いし、合法不法を問わずに宅地化が進み、居住地域拡大に歯止めがかからないため、市街整備、都市インフラは追いつかない状況であった。2000年に８あった街区は2008年には13に増えており、現在でもその市街域拡大は続いている[15]。

家屋は主に親族や同郷集団、職業仲間などによって建築される、いわゆるセルフビルドである。資金ができたら少しずつ建材を買い足していき、家族や親族、隣人の手を借りて家を建てていくのである。1988年時点での居住環境をみると、平均一世帯4.5人の家族構成に対して、一部屋だけの小屋が35%、台所を含んで二部屋が28%を占めており、家族構成に合った適切な居住空間を確保できている住居は僅か６%台にとどまっていた。素材についてはトタン屋根に日干しレンガの壁の住宅が主流であり、セメントやコンクリート、焼成煉瓦を使ったものは全体の一割に満たなかった[16]。学校など教育施設も街区内住民が中心となり建築を試みており、エルアルト全体として足並みがそろっていたわけではなく、また街区内でも集団間に差が生じていた。

1994年、地方分権化政策が実施されるとともに、大衆参加法が制定され、自治体の開発計画策定にあたっては、事前に居住区の住民組織からの計画提案を受けることが義務づけられた[17]。街区ごとに新しく地域基礎組織（OTB）または隣人組織と呼ばれる住民組織が形成された。街区の下位区分となる小区画ごとに住民会議を設置、その上位に街区全体の住民による総会が設けられた。住民たちは自治体に自分たちの街区の開発計画を提出するのみならず、その自治体による実施について、予算執行を含めて監査する責務を有する。つまり公共事業実施に関するチェック機能を有するのである。

住民組織同士によるエルアルト市住民組織連合が形成され、自治体行政体系の中に位置づけられた。無論、こうした自治体系がすぐに機能したわけではない。もとより住民たちは公共事業監査や市街形成に必要な知識を十分にもっているわけではなかったし、学歴も高くなかった。とはいえ住民たちは宅地整理や道路整備など住民総出で作業し合ったり、話し合ったりする経験を有していた。また USAID をはじめとする国際社会からの支援のもとで研修事業が展開された。軌道にのるまでには時間がかかったものの、民主的な住民参加型自治行政の確立を目指して試行錯誤が積み重ねられていった。

1990年代以降にエルアルトで生まれ育った青少年たちは、親たち住民が試行錯誤を重ね

ながら自分たちの町を自らの手で整備開発していくさまを目の当りにして育ってきた世代であった。こうした経験は、「故郷化」プロセスとみなしうるに十分であろう[18]。

### ２－２．2003年ガス戦争

エルアルト市は2000年頃には幅広の主要幹線を中心に町らしい景観を見せるようになっていた。住民参加型の市街開発手法も定着し、基礎インフラ整備も少しずつ進んでいった。順々と郊外住宅地としての景観が整い始めると、もともと貧しい家庭が多かったため、住民たちはそれぞれに生計向上に専心するようになる。またアルゼンチンをはじめとして海外への出稼ぎ、移民も増大していった。

青少年については、先住民族政党の結成にともない、政党に加入したり先住民族運動や社会運動などに参加する者もいたが、それは少数であり、多くは政治分野に強くコミットすることからは距離をおく慎重派であった。特に支持する政党はなく、友人間で政治については時々話題にする程度であり、政治的な事柄について興味を示す者がいる一方で、それ以上に、政治を好まない者、関心のない者がいたのであった。また関心があるとしても、積極的な行動に出るということではなかった[19]。民主化以降に大きな衝突がなかったことや、都市的生活様式の進展やグローバルな消費文化の浸透とあいまって、青少年の関心は政治から離れ、サブカルチャーなどより個別で身近なものへと移っていた[20]。

しかしこうした事態をひっくり返したのが2003年のガス戦争である。

ボリビアは天然資源が豊富な国であるものの、収奪的な資源採掘と輸出で一時的な繁栄は見てもその後の国家発展には活かされてはこなかった。天然ガスはボリビアが貧困から脱却できる切り札とみなされており、その採掘と輸出については、採掘会社、輸出ルート、利益配分などをめぐって議論が続いていた。外国企業による採掘とチリ経由での輸出販売案については、販売価格の低さとボリビア国家の取り分の少なさから、強い反発があがっていた。新自由主義経済政策をめぐってはすでに抗議行動が頻発しており、これらに対しては軍を動員する強硬策も取り始められていた。

天然ガス採掘を外国企業へ売り渡す政策に対する抗議行動が2003年10月にエルアルト市で実施された。これに対して軍は銃撃をともなう武力介入を行い、子どもを含む非武装市民を巻き込んで65名の死者を出す事態となった。この事態に対してエルアルト市民は直ちに蜂起。各街区や小区画で緊急集会が次々と開かれ、軍の襲撃に備えて自警団も結成された。住民組織連合がとりまとめる形でエルアルト市全域をあげた抗議行動が展開され、「軍 VS 天然ガス輸出反対運動集団」という図式はたちまちにして「軍 VS 市民」に一変したのである。そして人権にかかわる団体や市民社会を先頭に、ラパス市民をはじめボリビア全域に抗議行動が広がった。エルアルト市民による道路封鎖やラパス市内でのストライキなど、徹底したラパス市封じ込めによって主都機能は麻痺した。結局、大統領は辞任して国外逃亡し、事態は収拾された。

この経験は青少年にとっての「銃撃による洗礼」と表現される[21]。2003年時に20歳の若者は1994年時点で10歳である。彼らは、国家政策のもと民主主義的参加の重要性を教育され、前項で述べたように、NGO や国際機関による支援を受けながら市民参加型の街づくりの試行錯誤の実践を行う、その只中で育ってきた世代であった。それが、武力弾圧と死傷者を目の当りにしたのであった。「ガス戦争」から想起される言葉ないしイメージと

して「虐殺、暴力、弾圧」や「正義のための闘争、反乱」などがあげられており[22]、この経験は、あらためて差別と排斥の対象とされる自己の民族性を強く意識させたと考えることができよう。

しかしそれだけでなく、緊急事態の中で果たした青少年の役割とその経験はより大きく彼らの地域意識形成に影響したと考えられる。緊急事態の中、資源問題、利益分配、社会体制、貧困問題、経済政策、社会政策、そして自分たちの生活や居住区防衛などの様々な問題について家族や町内会で話し合いがもたれた[23]。

住民組織には青少年部会も作られていたが、基本的には世帯主を中心としていたため、扶養家族に位置づけられる青少年たちの存在はあまり重要視されていなかった。また世代的にも、軍事独裁政権を打倒し民主化を勝ち取った経験を持つ親世代たちからは「頼りない」「ひよっこ」扱いされていた[24]。しかし、この時ばかりは地区住民による集会や会議において青少年に意見が求められ、彼らの考えや意見、提案が十分な関心をもって聞かれたのである。TV を見る時にしか一緒にいないといわれるような青少年が、家庭の中で、地域住民の中で一人前の存在として扱われたのである。軍隊から自分たちの地域を守るための行動に実際に参加したこと、地域の構成員として認められたことは、青少年により一層のエルアルト市という地域への帰属感を高めることに作用したと考えられる。

## ３．帰属先の主体的選択、ボリビア人であること

### ３－１．自己認識

2001年時点で青少年の9割がエルアルト生まれになっていた[25]。2006年に15歳から24歳までのエルアルト市青少年960名に対して行われた調査によれば、「文化的アイデンティティは何か」という問いについては「アイマラ」と回答するものが70%、「エルアルト」と回答するものが５%、「ボリビア」と回答するものは９%であった。これに対し、「よりアイデンティファイするものは何か」という問いに対しては、「ボリビア」と答えるものが51%、「エルアルト」と答えるものが25%、「アイマラ」とするものは11%であり、最初の質問とは対照的な結果となった。この調査を行ったサマナムは、「文化的アイデンティティ」とは避けようのない付与されたものであり、これに対して主体的に選ぶのが「アイデンティファイ」であるとしている。つまりアイマラという先住民族性を初期条件として付与されているものと認識しつつ、青少年たちは、主体的にはエルアルト、さらにはボリビアという「地域・社会」を帰属先として選んでいるということなのである[26]。

無論、ボリビア人であるとする意識の背景には、新しい国家誕生により、これまでの主流社会からの差別に対抗するために先住民族的文化アイデンティティを強化していく必要性が低下したことがあるはずである。抑圧的体制が崩れたことにより、これまで認められてこなかった自分たちがようやく正当なボリビア人になったという認識が反映していると考えられる。

国立統計局による４歳以上人口に対する多言語状況に関する調査では、世代が若くなるほど話せる言語数が少なくなり、スペイン語を母語とする者の比率が高くなって７割を超えている。また出自に関しては10－19歳においては、非先住民族ないしどのエスニックグ

ループにも属さないとする回答が26％あり、他の世代の14％から19％よりも高い値となっている[27]。先住民族的特色が都市化の過程で実質的には薄れていきつつあると考えられる。グローバル化の進展にともない、ユニバーサルで均質的な消費文化の影響は否めず、また都市化の進展とともに個人化や個別化も促進される。両親が居住先を転々としたり、異なる民族間の婚姻が増えたりして、安定的に「故郷」を意識することが困難な浮動層もある。生活様式の変化にともない、地域性や民族性の特徴自体が希薄化してきているということも考えられる。また、海外への移動が日常化、常態化したことにより、渡航や国外滞留にともなう手続きなど、必然的に国家枠組みを再認識する状況が強まっていることも影響しているだろう。

とはいえ、「ボリビア」という国家枠への帰属は、他の帰属意識の低下という消去法的な作用の結果とばかりはいえまい。

アイマララップについては、たしかに民族性の称揚が強く全面に押し出されていた。しかしながら、同時に差別と貧困の状況がボリビア全土に共通することも認識されていた。

貧困生活の中で青少年たちが最も問題だと感じているのは、アルコール中毒や麻薬、暴力、犯罪、児童虐待、早期妊娠、中絶といった問題である[28]。とくに少年グループ同士の抗争は暴力性を強く帯びている。社会的にも経済的にも不安定な生活に、自己確立を模索する青少年期の心理的不安定さが重なる。農村共同体に代表されるような安定的な家族像や理念は都市的生活様式の中で変容し、世代間ギャップによる摩擦が顕在化するほか、貧困や出稼ぎなどの要因による家庭崩壊も生じている。ヒップホップグループは、ストリートチルドレンを含む、エルアルト市内でもより貧しい階層が多いといわれており、格差拡大や社会不安、汚職などの政治腐敗や政策の失敗などによる負の影響をより大きく受けやすい立場にある。

エルアルト市の青少年の日常は、一見すれば何でも実現することが可能に見え、夢を叶えることへの誘いに溢れているが、しかし実際には選択肢は限られていて、失意だけが増大していく。そんな閉塞感と苛立ちに満ちた状況こそがまさに「ボリビアの現実だ」とラッパーたちは歌う。彼らは日々感じ、見聞きしていること、日常的にさらされる差別や偏見、ストリートで暮らしていく厳しい現実を歌っているのであり、今生きているこの世界、それがボリビアであるわけだが、そのボリビアというテーマについて歌っているのである[29]。無論、グループによって歌詞の内容も方向性も異なるが、ヒップホップは、都市的状況が抱える問題、貧困や社会的排除という問題の中で成長していく青少年たちの表現であり音楽なのであり、彼らが置かれているボリビアという環境、枠組みを明確に意識させることにつながっている。その意識は同様な状況におかれている者同士の連帯へと発展し、それは「ボリビアの兄弟たち」という表現として現れる[30]。被差別者としての民族性の称揚は被抑圧者同士の連帯へとつながり、そこで予見される新しい社会・国家への帰属の意識が、青少年が帰属先として「ボリビア」を選んだ背景にあるのではないだろうか。

### ３－２．青少年団体の活動

エルアルト地域でのヒップホップ普及を促進し、アイマララップを誕生させたきっかけとされているのが、青少年文化の家ワイナタンボ（Casa Juvenil de las Culturas Wayna

Tambo）による文化活動支援である。2003年にワイナタンボのラジオ番組がヒップホップグループの活動と曲を紹介し、さらにCD化したことによって広く知られることとなり、さらにはラップについての講習会を開いたりグループ結成を手助けしたことで、エルアルト市青少年の間に浸透したという。2007年には定期的な演奏活動を行うグループが35、一時的なものも含めれば、100を超えるラップグループが結成されていた[31]。

ワイナタンボは1995年に青少年の文化活動振興のために設立された団体である。青少年のアイデンティティの強化と再生を支援することを目的とし、アンデス地域文化やアイマラ文化の独自性や特色を活性化すると同時に、平等と公正の観点から文化の多様性を強化することに焦点をおくとしている。また、市民社会の一員として青少年に求められる能力、例えば自治体の開発計画への参加に必要な、管理、提案、議論、交渉などに関する能力を培い、より参加型で民主的な公共性の確立をエルアルト市域および他地域で構築することに貢献することを目指している[32]。施設はエルアルト市の中でも初期に形成されたドローレス街区にあり、商業中心地から歩いて15分ほどと市内でもアクセスしやすいところにある。ラジオ放送と図書室運営、貸しスペースを軸として、火曜日から土曜日までの午後から夜間を対象に講演、ワークショップ、セミナー、コンサート、映画上映などの活動が行われており、同時間帯にカフェも運営されている。

活動テーマとしては「公平な関係の中での文化の多様性」、「アンデス―アイマラ文化の特徴」、「エコロジーおよび自然環境」、「市民性および市民社会への参加」、「ジェンダーの多様性と公平性」をあげており、具体的な活動としては、文化活動の促進と普及の観点から、コンサートや劇などの上演、展覧会やお祭りなどのイベントの開催、映画やビデオの上映、講演やディベートの実施、さらには異なる街区の青少年団体や学校をつなぐネットワーク形成支援を行っており、また毎月、学校などで教育目的の遊びを実施している。

またアーティスト育成も手掛けており、写真撮影や映像技術、編集技術の指導、絵画や小説作成のセミナーも実施されてきた。公民館や図書館といった社会施設や教育施設がほとんど整備されていないエルアルト市にとって、ワイナタンボの貸スペースや図書室は、教育活動、文化活動そして交流の点において極めて貴重な場となっている。

1995年は新自由主義的経済政策のもとで規制緩和・自由化政策が推進され、経済成長を目指すと同時に、教育や保健分野の社会開発推進によって貧困削減と近代的市民育成を実現しようとした近代化政策が展開されていた時期である。近代化政策に人的能力開発は不可欠であった。ワイナタンボが行う青少年文化促進支援活動もこの路線に位置づけることができる。しかし、職業訓練などの就労支援や保健衛生指導など「貧困緩和」や「開発支援」の観点から青少年に対して能力開発活動を行うNGOが多いのに対して、ワイナタンボは青少年自身による企画運営を主是として文化活動支援を行ってきている。

ワイナタンボ創設者の一人であるマリオ・ロドリーゲスは、青少年教育が専門で、情報と文化そして権力との関係を批判的に分析しつつ、単なる併存を超えた、公平な社会構築と文化共存にむけた市民育成のための教育の重要性を指摘している[33]。

ワイナタンボがヒップホップグループを支援したのは、たしかにアンデスやアイマラ文化の再活性化という目的のためであったが、しかしそれは政治的意図以前に、自己形成・自己確立の過程にある青少年の自己肯定を目的としたものであったと考えられる。先住民族系の苗字を知られたくないと思い、自分や父母の身なりを恥ずかしいと感じ、背が低い

こと痩せっぽちであることに劣等感を抱き、何日もシャワーを浴びることができずいて不潔な自分に嫌悪し、お金を持っていないこと、学校にいけないこと、路上では大人たちに煙たがられること、それでも日銭を稼がなくてはいけないこと、ありとあらゆることが劣等感を助長するように作用し、自己否定への誘因となる。そのようなエルアルトの日常の中で、青少年が自己肯定感と尊厳を回復すること、それがワイナタンボの活動の底流にあるのである。アイマララッパーたちが厳しい現実をその当事者として歌い、「アイマラ人」という自己を肯定して主体的に反抗していく、まさにその部分においてワイナタンボの活動は本領を発揮したのだと思われる。

しかしながら、ボリビアをテーマとして積極的に歌うこと、それはボリビアという現実が抱える問題の解決に自らが当事者として関わる立場になるということでもある。国家体制の変革や革命のために活動してきたわけではないものの、結果的に、ワイナタンボは公平な関係の中での多文化共生国家づくりに対して貢献することになり、その活動は評価されるようになっている[(34)]。

### ３－３．市民育成

2012年までに作成されてきた視聴覚教材 Pretextos para converser（話し合ってみよう）[(35)]をとりあげて、エルアルト青少年に対してどのような啓発をしているのか整理をする。本教材は全部で13のユニットからなる。それぞれのタイトルと内容については次頁の資料表にまとめた。ユニットは主に２分～３分、最長でも５分と短く、視聴後に、教材内で問いかけられた質問や疑問、状況設定などについて意見を述べ、発展的に議論を展開できるような内容となっている。当初はラジオ番組で使用するために作成されたため、分かりやすいセリフや背景説明となっており、また教材はすべてエルアルト市内の状況、問題、課題にもとづくものである。したがって例えば差別の問題については、エルアルト市内での差別を問題としてとりあげているのである。

前述したワイナタンボの活動テーマのうち、本教材は「市民性および市民社会への参加」「エコロジーおよび自然環境」のテーマに沿ったものとなっており、具体的な内容として、市民性を問うもの、偏見や差別に関するもの、生活様式に関するもの、および環境に関するものに区分できよう。無論それぞれ相互の関連性もあり、議論の中でいろいろと発展させることができる内容となっている。

教材①では、多文化共生を前提にした国民であるためには、同時にそのような国を実現するためには何をしたらいいのか問いかけ、教材②ではエルアルト市民であることの内実を問うている。この2教材は、青少年自身が、目指されるべき民主的かつ公正な多文化共生社会を形成する主体であることを前提とし、その主体性を問うものである。

教材③以降は具体的な問題に沿って作成されたものであるが、まず教材③では情報の偏りの問題、メディアリテラシーを取り上げている。文化のグローバル化について議論する内容であると同時に、まず当たり前だと思っていること自体や、判断の基準、判断材料について客観的に問い直す必要があることを題材にしたものでもあり、議論や考察をしていく際の手法についての導入教材ともなっている。

伝統的祭りへの参加を題材にした教材④では、時間も手間も費用もかけて参加するだけの意義があるのか、伝統文化の意味や存続について考えてもらう内容となっている。モレ

## 表：市民育成のための教材、「Pretextos para conversar（話し合ってみよう）」

| 番号 | タイトル | 時間 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| ① | 「Estado Plurinacional（多民族国家）」 | 5分 | 貨幣に刻印された国家名称をとりあげ、なぜ国家名称が変わったのか、República と Plurinacional は何が違うのかなどについて父娘が会話をする。共和国時代は偏見や差別にもとづいた体制だったこと、そしてこれからは公平で平等な形での多文化共生な国になるのだという父親の説明に対して、娘が、具体的に自分は何ができるのか考える。 |
| ② | 「Qué es ser ciudadano（市民とは）」 | 2分 | 一人の少年のモノローグ。自分はエルアルト市民である、けれどもエルアルト市に暮らしているから「市民」なのか、赤ん坊は「市民」なのか、高齢者は「市民」なのか、裕福な人、貧しい人、学校にいっている人やいない人についてはどうなのか。そもそも一体「市民」とはだれなのか、どういう人が「市民」なのか、とエルアルト市内を歩き回りながら質問を投げかける。 |
| ③ | 「El Arte（アート、文化について）」 | 3分半 | 自分にとって音楽は不可欠である、という今時の音楽が大好きな少女が主人公。テレビや雑誌でとりあげられる最新情報をチェックしているが、次第に自分が依拠している情報に偏りがあることに気付いていく。ロックやポップスがバックミュージックとして流れ、エンディングでは「sistema falla（欠陥のあるシステム）」という歌詞のラップが流れる。 |
| ④ | 「Tradiciones y Convivencias（伝統と共生）」 | 2分45秒 | モレナーダというお祭りで伝統的な踊りに参加する少年。しかし、踊りの衣装や小道具には費用がかかるし、練習時間も必要になる。モレナーダのパレードの映像とその中で踊る少年の姿を映しながら、伝統的な祭りの重要性は分かりながらも、参加を続けていくことに躊躇する少年の葛藤が描かれる。 |
| ⑤ | 「El Chuño（チューニョ）」 | 3分半 | アンデス高地先住民族特有の食文化である凍結乾燥ジャガイモについて、その作り方を解説している。 |
| ⑥ | 「Igualdad（平等について）」 | 2分 | 農村から来たとおぼしき身なりの粗末な年配の男性がレストランにはいったところ、オシャレな恰好をした若い人たちには愛想よくアテンドしていた若いウエイターが、店の奥まった端にある席へ行けと乱暴な言葉づかいで対応し、なかなか注文もとりいかずにぞんざいな扱いをする。服装や外見、年齢などにもとづく偏見や差別について考えてもらう内容である。 |
| ⑦ | 「Ser Cachivachero（日雇い労働者）」 | 3分半 | 最新の流行に敏感でお洒落好きな娘は、建設現場で汗まみれで働き服装にも無頓着な父親に対して幻滅感を抱いており、見っともなくて恥ずかしいと思っている。しかし自分がお洒落できるのも、何着も流行の服を買えるのも父親のおかげである。娘の心情を通して、労働や消費をめぐる価値観について議論してもらう内容。 |
| ⑧ | Aprendiendo de la abuela（お祖母ちゃんから学ぶ） | 3分 | エルアルト市内に住む青年が、長らく会っていない農村の祖母を訪ねる。インスタント食品をはじめとして缶詰や瓶詰商品、パック商品など都会からのお土産をもって訪ねるのだが、祖母の家にはこれまでのお土産が封を切らずに残ったまま。祖母は、使い方が分からないし、自分が必要なものは市場で全部調達できるからあまり必要ないのだと答える。青年は市場で調達した材料でこしらえた食事をとりながら、エルアルト市内の市場を思い出し、スーパーマーケットと市場との違いについて考える。 |
| ⑨ | 「Juguemos todos（一緒に遊ぼう）」 | 2分50秒 | 仲良く遊んでいた3人の小学生が、ある日母親から一緒に遊んではいけないと叱られ、引き離されてしまう。子どもたちは、なぜ一緒に遊んではいけないのか、分からないまま、その後一緒に遊ぶ機会をもてず、寂しい時間を送る。 |
| ⑩ | 「Vivir en comunidad en la cuidad（都市生活のつめたさ）」 | 3分 | 農村からエルアルトに移住した若者のモノローグで構成されている。教育と収入向上、そして都市への憧れで喜び勇んで移動したものの、なかなか仕事が見つからず、見つかった仕事も重労働の単純作業、そしてインスタント食品を中心とした食生活、あらゆることにお金がかかることなど、思ってもいなかった都市生活の負の側面を提示し、悩んでいる自分にはまったく関心を示さない都市生活の冷たさについて語る。 |
| ⑪ | 「Soberanía alimentaria（食事にみる尊厳）」 | 3分 | パーティーで夜更かしした翌日、寝坊して起きたら家にはだれもおらず、おなかが空いたものの、綺麗なネイルを剥がしたくもないので、何か簡単な食事にありつけないかと外にでる今時の女の子が主人公。お金が足りないのでスーパーマーケットではなく、近くの市場へ出かけたところ、化粧もオシャレもしていない友達に会う。友達は弟が体調を崩したので、栄養になるものを調達しに来たのだという。主人公の少女は、いつもハンバーガーや「オイシイ」ものを食べていたのに、と不思議に思い、栄養のバランスや食事の質が大事なのだと思い至る。 |
| 番外1、⑫ | 「Despues del basurero（ゴミの行方）」 | 3分 | ゴミ箱の中身の行先を探索していくというもの。環境教育教材と位置付けられるものであり、使い捨てや大量消費といった生活様式について考えるための内容となっている。 |
| 番外2、⑬ | 「Tiempo de vida de las cosas（モノの寿命）」 | 2分半 | 新製品のミキサーを購入したが一年も経たないうちに壊れてしまった。修理に出そうとしたが、新製品なので替えの部品が手元になく修理できない。昔の機械は壊れにくく長い間使っていたのに、今は次々と新しい製品を買って古いものを捨てていく。これでいいのだろうか、と使い捨てを前提とした大量生産大量消費の生活について考えてもらう内容である。 |

ナーダはボリビア国内に広く根付いている伝統的舞踊である。民族性称揚やべき論とは異なり、じっくり文化の継承について考えることができる内容となっている。

教材⑤は伝統的な食材である凍結乾燥じゃがいもの作り方を紹介しているものだが、エルアルト市青少年が農村でのじゃがいもの生産加工についての知識や経験を失っていることが伺える。教材⑧と⑪は、消費社会の価値観の問い直しを迫まるものであり、教材⑦もこれに関連しており、労働に対するイメージ、価値観を問い直す内容となっている。生産から切り離されていくことで関心も薄れ、消費の側面にのみとらわれることを問題として提示している教材である。教材⑫と⑬は同様の問題を環境の点から提示しているものとなっている。

教材⑩も消費社会の問題をとりあげているが、むしろ都市的生活様式による関係性の希薄化に重きがおかれている。どのように関係性を構築していけばいいのか、コミュニティーをどう形成していけばいいのか、市民性喚起につながる内容となっている。

教材⑨と⑥は身近に存在している偏見や差別、一方的な対処などの問題をとりあげたものである。教材⑥は、主に大人から軽く扱われて差別の対象になっていると思っている青少年に対して、差別をする側でもあることを明示しており、世代間の摩擦に関する議論の他に、職業や仕事という観点からの議論、関係性構築の観点からの議論、農村と都市の関係についても議論を広げていける幅をもっている。教材⑨については、エルアルト市内の階層差や家庭の教育方針の違いに基づく、大人の一方的な判断と行動によって子どもが傷つき、またいろいろな子どもたちが接触しあうという機会が奪われることになることを考えてもらう内容である。児童の権利についてだけでなく、効率や効果を重視していく際に生じやすい「単一化」「多様性の排除」を問題としてとりあげることができる。

以上の教材については、実際に使用している状況に関して参与観察をして分析していく必要があるものの、いずれも民族間の共生といった大きな問題をとりあげているわけではなく、極めて身近なところにある問題をとりあげながら、その背後にある仕組みや価値観を問い直し、同時に自分たちはどう振る舞っていくのか、問いかけるものとなっている。

市民育成は、エルアルト人であること、だけでなく、エルアルト人になること、そしてエルアルトという地域社会を意識することと不可分なのである。

## おわりに

植民地支配の遺制が残るボリビアでは、排除のメカニズムは身体的特徴や服装、言語、慣習、信仰、出身地、職業、経済水準などの文化的社会的指標において、先住民族性をめぐって発動していた。アンデス高地農村から移動してきたアイマラ語系住民の多いエルアルト市は、主都ラパス市に象徴される白人種を最良とする優劣一元的社会文化体制の中で常に偏見・差別、排斥の対象であった。これに対抗する形で民族意識が高まりを見せた。青少年の帰属意識にも民族性を称揚し、人種的特徴を鼓舞する側面が見られた。しかし多くは文化的帰属先としての認識であり、すでに自分に付与された枠組みとしての認識と考えられる。そもそもエルアルト市の青少年は生活様式でいえば都会っ子なのであって、必ずしも社会排除の対象となってきた、農村に住む典型的な先住民族の民族性をまとってい

るわけではない。

物理空間的および行政区としてのエルアルト市民であるという意識については、エルアルトという名称から想起される民族的出自や先住民族人口の多い都市であるという条件から、民族的帰属をさしあらわらす側面がある。しかし一方で、エルアルト市民であるという認識の中には、より積極的な地域社会への帰属意識があると考えられる。それは10年以上の時間をかけて青少年たちが目のあたりにしてきた、住民自身による街づくりプロセスであり、そのプロセスへの直接的参加の経験によるものである。

住民参加型の街づくり体制は、1994年の政策方針に代表される国家の近代化、特に民主主義促進をめざす政策の一つであった。民主的な意思決定、公平な社会構築と人権抑圧的制度の撤廃という国際社会における潮流、そしてグローバル化の影響のもとで、より積極的な地域社会への参加と市民形成の実践が行われていた。青少年団体であるワイナタンボの活動もその中に位置づけられる。

ワイナタンボの活動目的の一つが、民族性の再評価であり文化的アイデンティティ強化であった。その結果、アイマララップ、アンデスヒップホップという民族性を強く主張する音楽分野が確立した。ただしヒップホップは同時に、現在置かれている都市的状況が抱える問題、貧困問題、社会的排除の問題を抱えてその中で成長していく青少年たち自身の表現であった。被差別者として厳しい現実に苛立つ者としての認識は、同様の状況に置かれている人々とともに体制を打破していく方向性をもたらし、新しい社会の最大の枠組みである国家への帰属意識を刺激していった。ただしボリビア人としての帰属意識は、既存の「国家枠」に迎合、包摂されるというよりは、被差別者同士の水平的なつながりと問題の共有の中で、当事者として置かれている状況そのものへの帰属を示しているのでもあり、であるからこそ主体的な関与者、作り手としての可能性を期待させる。

「Pretextos para conversar（話し合ってみよう）」にみられたように、ワイナタンボは、「与えられた」アイデンティティではなく「作り出す」「解決する」主体性の発揮に重要性をおいて活動しており、それが結果的に、目指されるべきより公平な社会、多文化共生社会、そして多民族・多文化共生国家の創設に必要な人材の育成につながっているのである。「先住民族」に依拠している間には問わずにすんできた身の内の差別構造にどう向き合うのか、という問いも投げかけている。エルアルト市青少年が回答した、民族、地域、国家の３つの帰属先と帰属意識について、意識形成要因や、背景、意識の内実について述べてきたが、「葛藤」しながら「参加し」「選びとり」「作り出す」ことに重きをおいた実践的な経験の積み重ねが、新しい社会構築の礎となるのだということからすれば、エルアルト青少年が今後「市民」としてどう振る舞っていくのか、問われてくることになろう。

## 注記

（１）和名については日本国外務省の訳名を踏襲する。

（２）ボリビアの先住民族集団については、中には人種を基準として区分される集団も存在しているが、大半は使用言語によって区分されている。本稿が対象とするのはアイマラ語およびケチュア語を母語とする集団であるため、必要に応じて言語系を明示して記述する。

（３）ラパス県ムリーリョ州ラパス市は、政治行政に関わる主要機関がほぼすべて集中し

ており、また経済、通商上においても重要な拠点であるが、憲法上の首都はボリビア中央南部にあるチュキサカ県スクレ市であるため、本稿では主都と記載する。

（４）政治化や政治参加については TORREZ Yuri, *Jóvenes en los laberintos de la polarización,* CCI, La Paz, 2009. および SAMANAMUD Jiovanny, *Jóvenes y política en el Alto,* PIEB, 2007. が詳しい。

（５）エルアルト市では、極貧層が17.9%、貧困層が49.3%を占め、合わせて66%にのぼる。非貧困層についても、基礎的ニーズを満足たしている層は7.5%であり、25%は貧困ギリギリとなっている。
Instituto Nacional de Estadísticas, *Nota de Prensa,* No. 25, 6 de Marzo, 2008, p. 7.

（６）Gobierno Autónomo Municipal de El Alto, *Población,* www. elalto.gob.bo/.; Instituto Nacional de Estadísticas, *Censo 2001,* http://apps.ine.gob.bo/censo/make_table.jsp.（いずれも2013年９月30日最終アクセス）

（７）Instituto Nacional de Estadísticas, *Censo 2001*.

（８）1994年に人類学者、社会学者が中心となって開いた農村からの移民に関するシンポジウムでは、移民現象の一時的な出稼ぎ性が強調され、都市占拠を目的としていないこと、農村部との双方向の移動があることを示すことで、主流社会が移民の取締りや強制排除に向かわないように釘をさそうとした。

（９）Programa de las Naciones Unidas para el Desarrollo (PUND), *Desarrollo Urbano Ciudad El Alto,* UNDP, 1990, pp. 27-34.

（10）YAPU Mario, *Jóvenes Aymaras sus movimientos, demandas y políticas públicas,* PIEB, 2008, p. 11. 親からの強要による労働も含めると家計補助の理由は60.8%となる。「自分の自由に使うため」という回答は6.9%、「経験を積む、働くのか好き」は5.6%、「働ける年だから」は６%となっている。学費工面のためという回答については全国平均より４ポイント高く、貧しい中でも青少年自身が教育を重視していることが伺える。労働時間については週55～60時間となっている。ROSELL, Pablo; ROJAS, Bruno, *Destino Incierto,* CEDRA, La Paz, 2006, p. 38.

（11）ROSSELL Pablo; ROJAS Bruno, 2006, pp. 15-18, p. 41.

（12）YAPU Mario, 2008, pp. 59-60.

（13）MOLLERICONA Juan Y. *Jóvenes Hiphoppers Aymaras en la ciudad de El Alto y sus luchas por una ciudadanía intercultural,* 2007, La Paz. pp. 11-15.

（14）MOLLERICONA Juan Y., 2007, pp. 25-30.: SAMANAMUD Jiovanny, *Jóvenes y Política en El Alto,* PIEB, La Paz, 2007, pp. 65-72.

（15）Gobierno Autónomo Municipal de El Alto, *Población,* www. elalto.gob.bo/.

（16）Programa de Naciones Unidas de Desarrollo, 1990, pp. 52-55.

（17）1995年からは新自由主義経済政策による近代化が積極的にとられた。そのため小さな政府をめざすことになり、地方分権の方向へ動いたのである。しかし文化的社会的分裂要因を多く含むボリビアでは、そもそも国家による社会包摂不全が大きな問題となっていたのであり、近代社会に不可欠な民主主義深化という点からばかりでなく、大衆参加法は、行政機構の整備とそこへの住民の統合によって、中央政府縮小にともなう社会不安リスクを避けるためのものでもあったと考えられる。

（18）出生地＝故郷、とするのに対し、「故郷化」は、出生地であるか否かにかかわらず、ある地域と地域社会に対して、その維持、発展、変革などに主体的、積極的に関わり、地域住民との間に強い関係性を築く中で、当該地域と地域社会に対して愛着を感じていく結果、「故郷」としての帰属意識を持つようになることを指し表わす。

（19）SAMANAMUD Jiovanny, 2007, pp. 34-35, 37.

（20）MÉNDEZ Ana; PÉREZ Renán, Organizaciones juveniles en El Alto, PIEB, 2007, pp. 7-15.

（21）IBAÑEZ Mario Rodriguez, *Para Seguir vivendo,* Wayna Tambo, El Alto, 2004, p. 10.

（22）SAMANAMUD Jiovanny, 2007, pp. 44-46.

（23）IBAÑEZ Mario Rodriguez, 2004, pp. 10-12.

（24）ROSSELL Pablo; ROJAS Bruno, 2006, pp. 47-55.: GUAYGUA Germán; RIVEROS Angela; QUSBERT Máximo, *Ser Joven en El Alto,* PIEB, La Paz, 2000, p. 24, p. 45.

（25）Instituto Nacional de Estadísticas, *Censo 2001.*

（26）SAMANAMUD Jiovanny, 2007, pp. 54-55: IBAÑEZ Mario Rodriguez, 2004, p. 14.

（27）Instituto Nacional de Estadísticas, *Censo 2001.* 10－19歳についてはスペイン語を母語とする者が74％を占め、平均値の61％を13ポイント上回っている。アイマラ語については平均値31％に対して、23％にとどまっている。これに対し、20－29歳についてはスペイン語を母語とするものは59％であり、アイマラ語を母語とするものは35％となっており、10－19歳の数値とは逆の傾向となっている。

（28）Viceministerio de la Juventud, Niñez y Tercera Edad, *Encuesta de Juventudes en Bolivia,* Ministerio de Desarrollo Sostenible, La Paz, 2003. pp. 160-161.

（29）MOLLERICONA Juan Y., 2007, p. 22.: SAMANAMUD Jiovanny, 2007, p. 70.

（30）SAMANAMUD Jiovanny, 2007, pp. 66-70.

（31）MOLLERICONA Juan Y., 2007, p. 12, pp. 16-18.: SAMANAMUD Jiovanny, 2007, p. 66.: YAPU Mario, 2008, pp. 51-53.

（32）Casa Juvenil de las Culturas Wayna Tambo, perso.wanadoo.es/web-osqui/principal.htm（2013年10月１日最終アクセス）

（33）IBAÑEZ Mario Rodriguez, 2004, p. 19.

（34）El Diario, *El Wayna tambo un espacio cultural alternativo destinado a la juventud,* www.eldiario.net/noticias 2012/2012-10/.../nacional.php?n（2013年９月30日最終アクセス）

（35）2013年３月にワイナタンボを訪問した際に入手したDVD教材、2012年７月～12月にかけて採録されたものであるが、編集者等は不明。

## 引用文献


・Guaygua, Germán; Riveros Angela; Quisberto Máximo, *Ser Jóven en El Alto,* PIEB, La Paz, 2000.

・Ibañez, Mario Rodriguez, *Para Seguir vivendo,* Wayna Tambo, El Alto, 2004.

・Instituto Nacional de Estadísticas, *Censo 2001,* http://apps.ine.gob.bo/ censo/ make_table.jsp.

・Instituto Nacional de Estadísticas, *Nota de Prensa,* No. 25, 6 de Marzo, 2008.
・Mollericona, Juan Y. *Jóvenes Hiphoppers Aymaras en la ciudad de El Alto y sus luchas por una ciudadanía intercultural,* La Paz, 2007.
・Programa de las Naciones Unidas para el Desarrollo (PUND) *Desarrollo Urbano Ciudad El Alto,* La Paz, 1990.
・Tórrez, Yuri; Cámara, Gloria; Carrasco, Daniela; Tórrez, Mariel; Dipp, Shirley, *Jóvenes en los laberintos de la polarización,* CCI, La Paz, 2009.
・Samanamud, Jiovanny, Jóvenes y Política en El Alto, PIEB, La Paz, 2007.
・Viceministerio de la Juventud, Niñez y Tercera Edad, *Encuesta de Juventudes en Bolivia,* Ministerio de Desarrollo Sostenible, La Paz, 2003.
・Yapu, Mario, *Jóvenes Aymaras, sus movimientos, demandas y políticas públicas,* PIEB, La Paz, 2008.

**参考文献**

・遅野井茂雄、村上勇介編著『現代アンデス諸国の政治変動』、明石書店、2009年。
・重冨惠子「中央アンデス高地農村の変容」都留文科大学比較文化学科編『せめぎあう記憶』、柏書房、2013年。
・独立法人国際協力機構、国際協力総合研修所『ボリビア国別援助研究会報告書』、JICA、2004年。
・Gobierno Municipal de El Alto, *Plan de Desarrollo Municipal El Alto,* 2000.
・Lara, Ángela, ed., *Tinku; Transición y conflicto,* PIEB, La Paz, 2005.